

アトリエ 琉游舎 だより 215号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2025年10月8日発行

ゆくあきや 手をひろげたる栗のいが

芭蕉



- 秋になるとコリーナでは山栗がそこら中に落ちています。イガが青いまのものはそのまま放っておかれ、道の端に足で追いやられますが、いががはぜて実が取り出しやすくなったものからは、散歩ついでに実がビニール袋一杯になるほど採れます。山栗は市販の栗に比べて小さく、むく手間も大変なのですが、とても美味しいので栗拾いが盛んなコリーナの今です。
- 松尾芭蕉は三重県伊賀の出身です。芭蕉が最後の旅で故郷に立ち寄った、死の一ヶ月前の句です。背景を知らないで読むと「晩秋のイガのはぜた栗を見ていると、手を広げて行く秋を押しとどめているように見える」と秋の終わりを惜しむ気持ちを読んだ句にみえます。
- 実はこの句の背景には、年老いた芭蕉がまた旅立つのを押しとどめようとする伊賀の門人たちの引きとめがあったといわれています。イガが秋を惜しんで手を広げている姿に見立てて、伊賀の門人が大きく手を広げて、自分の旅を押しとどめようとしていることを暗示しているのです。ここで後年いろいろな解釈がおきました。俳諧を文学的思想的価値まで高めた芭蕉が「イガ」と「伊賀」を語呂合わせするような駄洒落の句を詠むはずがないという先入観があったのかもしれませんが。最晩年の駄洒落句は死を目前にした俳聖芭蕉の評価を落とすことになるというひいき筋は考えたのでしょうか。しかし私はこれが語呂合わせの句だろうと、去りゆく秋や旅立つ人、死出の旅をも押しとどめたいと言う気持ちが表れた秀句だと思います。
- 先日、縁あって三重の伊賀市に行ってきました。芭蕉生誕の地、忍者の里です。伊賀上野城跡の公園を散策しましたが、栗の木は見当たりませんでした。季節はやっと夏が終わり、何とか秋になったようですが、栗の木はイガ栗を全て落として葉を落とす時期になったようです。柿の実も熟れて食べ頃。気候はまだ秋の初めですが、生き物のサイクルはいつもと変わらない秋の盛りです。手を広げて押しとどめても、人も時も季節もありのままに。合掌。

10月・11月スケジュール

			木	金	土	日
			9	10	11	12
火	水					
13	14 読書会 13時半から	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28 読書会 13時半から	29	30	31	11月1日	2 写経会 13時半から
3	4	5	6	7	8	9

読書会

10月14日 (日)
10月28日 (日)
13時半から

写経会

11月2日 (日)
13時半から

狂言綺語…私の仏様(伊賀の里にて)

伊賀は盆地の中にありました。奈良から鉄道で約一時間、木津川沿いの溪谷を抜けていくと急に盆地が開けてそこが伊賀市です。忍者の里、芭蕉の生誕地という観光資源があるためそれに関係する施設が点在していますが、今回の伊賀訪問の目的は観光ではありません。浄土真宗高田派のお寺、大仙寺での「**秋季彼岸会永代経法要**」とその後の「講演会」に参加するためです。講演会の講師は私、日蓮宗僧侶戸井出琉です。

仏教は排他的な宗教ではないので、異端として他宗派を排除することはないのですが、とはいえ教義も本尊もよって立つ経文も違うわけですから、殊更に他宗派同士が交流することはありません。そんな宗派関係の中で、今回の私の訪問は大仙寺にとっても、檀家の皆さんにとっても初めての出来事だったかもしれません。その様な宗派間の基本的な関係の中だからこそ、私は今回の体験をととても得がたく、今後の信行の道筋が一層視界良好となり、多くの道が眼前に開けたことを強く実感することのできた貴重な経験となりました。

私は日蓮宗の僧侶としての信行も自負も人には劣らないと思っています。その自負の根本には、日蓮聖人に信行の実践を学び、その方法論と精神を通して自分自身の仏の道を歩むことが私の仏教であるとの確固たる信があります。各々が仏の道を歩む道筋は各々の方法論があり、それを誰に学びどのように実践するかは、一人一人が決められること、決めるべきことです。それが仏に帰依することなのです。自分の帰依するものが私にとっての唯一無二のものです。それを仏法とも仏宝とも呼んでよいでしょう。自分の宝を唯一無二のものとする者は、他者の宝も自分の宝と異なっていようが尊重し、自分の宝と同じように敬い賞賛すべき宝なのです。これが仏教の底流に通奏低音のように流れる仏様の願いです。そしてこの願いの実践が仏の道を歩むこと、実践を支えてくれるものが仏の慈悲です。これは言葉や約束や契約として仏様と仏教者の間で交わされたことではありません。それは大いなるものの慈悲、ありのままの世界、宇宙のはからい、その様なものに私たちが触れたときに、自ずから自然に生まれる「信」です。誰を通して、何をきっかけに触れたのかは人それぞれです。恐らく私は日蓮聖人の信行の実践を通して触れたのでしょう。大仙寺に集う皆さんは親鸞聖人の言葉に込められた願いを通して触れたのです。ありのままの今を信じて帰依する人達が一同に集まった「場」には「信」の喜びが充ち満ちています。そこでは日蓮聖人はこう言ったや親鸞聖人はこのように考えていたはずだは何の意味もないのです。ただ安心と信頼と共棲の「場」であることに安らぎを覚える人々がいるだけなのです。仏教が安らぎの処（浄土・涅槃）へと歩む宗教であるとはこのことなのです。

なぜ私が大仙寺の「場」に在ることができたのか。それにはきっかけがあり、出会いがあり、継続と展開がありと、その経緯を辿ることは可能です。しかしその経緯を解き明かしてもその「場」に私が在ることには何も変わりはありません。そこに私をあらしめたことがありのままの今なのです。それをお釈迦様は「因縁」と名付け、縁起の法則として私たちに示しました。そこに在る私は、大仙寺で法要に参加し、浄土真宗高田派の信者と僧侶の皆さんに「私の仏様」についてお話をするように導かれたに過ぎないのです。仏様の縁です。ありのままの今です。大いなるものの導きです。私は仏と名付けられたもののはからいのままに、大仙寺で「私の仏様」への「信」の確かさをあらためて認識し、その姿を目の当たりにした皆さんは「私の仏様」に思いを寄せてもらいながら「各々自身の仏様」への信の確信と安らぎに身を任せていたのです。

私が日蓮宗教師となるための修行期間で徹底的に教えられたことは、仏法僧の三宝への「尊重の心」と「厳粛な態度」です。それを正しい所作と姿勢で行い、三宝への給仕の心と儀礼を身につけることでした。その結果僧侶は導師として衆生を導く役割を認められることになります。日蓮宗では僧侶は衆生を教化し法華経の教えに導く「師」なのです。つまり仏様と衆生の間を一本の線で導く仏様の仲介者のような役割なのです。ですから僧侶には親しみやすさや庶民的な佇まいよりも、荘厳された環境と尊厳のある言葉と態度が必要とされるのです。心と所作（信行）が一致すればよいのですが、それがカタチに頼るようになると、僧侶は単なる権威となり、儀式の主催者に成り下がってしまうでしょう。私はその危険性を修行時代から本能的に感じ取っていたので、儀式に頼らず「行」によって三宝への給仕を実践することを心がけてきました。

大仙寺で彼岸の法会が始まりました。住職と副住職の先導で法要は進むのですが、その雰囲気が非常に和やかなのです。住職がご宝前でいくつかの所作を行い（日蓮宗の所作とは全く異なります）、その後長い偈文が読まれます。親鸞聖人の言葉を抑揚（節）をつけながら檀家の皆さんと一緒に15分くらい唱和するのです。そこには親鸞聖人の言葉を皆で唱和することの一体感、連帯感、同胞感を門外者の私も強く感じました。他宗派が仏と衆生を直線で結ぶ導きの宗派であるならば、浄土真宗高田派は仏様を真ん中にして、僧侶も信者も門外者もぐるりと仏様を取り囲む車座の宗派だったのです。浄土真宗の他の寺派の法要を経験したことがないので、確定的なことは言えませんが、少なくとも大仙寺では僧侶も信徒も真中に阿弥陀仏があり、それを親鸞聖人の言葉を通して各々が互いの声を聞き合いながら、そこに仏様の声を聞く「場」だったのです。

仏教と一括りにして語ることに抵抗を覚える方もいるかも知れません。それほど仏教は多様性に充ち満ちています。しかし今回の伊賀行で強く確信したことがひとつあります。それは、仏教は人それぞれが「私の仏様」を持つことのできる宗教だと言うことです。日蓮宗の僧侶が浄土真宗高田派の寺で住職や信者の皆さんと、親鸞聖人の言葉を唱和したとき、「私の仏様」とともに信行することを「願い、誓い、行う」ことはひとつであることを確信しました。仏教には大いなるもの（仏様）がすべての衆生を大きく包み込む慈悲があるのです。それを信じることのできる人は「私の仏様」を信じることのできるのです。